

KANTO GAKUIN UNIVERSITY

THE ENGLISH DEPARTMENT NEWSLETTER

関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科 ゼミナール連合通信 第13号 2025年2月19日発行

学科長冒頭挨拶

「ゼミナール連合会」が結成されてから干支が一巡りし、今回「ゼミナール通信第13号」の発行を迎えました。本号から、ゼミ連の学生の積極的な発案により「読みたいと思ってもらえる」紙面づくりを目指し、デザインとレイアウトが刷新されました。学生目線で「英語文化学科の今」をお届けします。

記事のラインアップから分かるように、英語文化学科生は日々、勉学と多彩な活動に取り組み、忙しい大学生活を送っています。2024年度の目新しいイベントとしては、横須賀・三浦で開催されたウィンドサーフィンW杯に多くの学生がボランティアで参加したことや、シェイクスピア英語劇のワークショップと『マクベス』を招聘したこと等が挙げられるでしょう。また、GAP (Global Awareness Program) では、選考を通った学生が(株)nittohのインドネシア工場を訪問したり、提携大学の学生と交流を深めたりしました。

昨今の円安の影響で海外留学の敷居が高くなっていますが、KGUでは英語圏の提携大学に加え、新たにタイや台湾の提携先を開拓するなどして、国際交流の機会を拡げています。英語文化学科生の大学生活が実り多きものとなるよう、今後とも教職員一丸となって支援して参ります。

国際文化学部 英語文化学科学科長 萩原美津



CONTENTS

- page1 | 学科長挨拶
- page2 | GAP (Global Awareness Program)
- page3 | 海外留学 / English Camp
- page4 | Windsurfing World Cup / 国際文化カフェ
- page5 | 英語俳句コンテスト / ゼミナール紹介
- page6 | Shakespeare Workshop
- page7 | 教育実習 / 卒業論文
- page8 | 就職体験談 / 編集後記(Vista 13)



英語文化学科で2023年度から始まったGAP（ギャップ: Global Awareness Program）の学生は、実際にどのように英語を学んでいるのでしょうか？ 今回はGAP 2年生の田代暖さんにインタビューをしました！

GAP Q1. GAPとはどのようなプログラムで実際にどのような授業が行われていますか？

—GAPは卒業に必要な単位の6割以上を、ネイティブの先生が担当する授業で取得するプログラムです。英語の授業は最もレベルの高いクラスで受講でき、留学生と一緒にのクラスで英語でのプレゼンテーションなど実践的な学びの機会が豊富にあります。

Q2. どうしてGAPに参加しようと思いましたか？

—将来、海外で仕事や生活をしたと考えていたこともあり、このプログラムを通して日本にいながら英語に多く触れられると思ったからです。

Q3. 実際にGAPに参加してどのような力が身についたと思いますか？

—海外の人と話す勇氣と度胸が身につき、道で話しかけられたりアルバイトで対応する際も自信を持って英語で話せるようになりました。

Q4. おすすめの英語の勉強方法がありますか？

—洋楽を聞いたり、海外のYouTuberなどの動画を見るほか、英語ネイティブの友人と会話することです。

Q5. GAP担当の先生方の印象は？

—学生をよく理解しようとして下さり、勉強だけでなく食事に行ったり、時にはプライベートに関する相談にも乗ってくれます。

Q6. GAPに参加してみて新たに感じたことはありますか？

—GAPで学ぶなかで感じたのは、英語の成績に関係なく、情熱とやる気があれば十分についていけるとことです。最初は周りの会話がわからずに苦労しましたが、続けることで英語の力がつきました。英語力に自信がなくて迷っている人も、ぜひこの環境に飛び込んでみて欲しいです！

（英語文化学科 3年 林大輔）

The GAP (Global Awareness Program) began in the 2023 academic year. We interviewed second-year student Non Tashiro, who is currently participating in the program.

Q1. What is the GAP program, and what kind of classes are offered?

—The program allows students to fulfill at least 60% of the credits required for graduation with courses taught by native English-speaking instructors. Students are also placed in the highest-level English classes.

Q2. Why did you decide to join GAP?

—I wanted to work and live abroad in the future, and I thought this program would allow me to immerse myself in an English-speaking environment, even while in Japan.

Q3. What skills do you feel you've gained through GAP?

—I gained the courage to speak with people from other countries. I now respond confidently when approached on the street or while interacting with customers at my part-time job.

Q4. Do you have any recommended ways to study English?

—I listen to Western music, watch videos by foreign YouTubers, and chat with my native English-speaking friends in English.

Q5. What are the teachers in GAP like?

—The teachers from GAP understand their students well, not only offering academic support but also engaging with us socially and personally.

Q6. What have you noticed since joining GAP?

—I've realized that passion and motivation are more important than your previous English grades. Even if you struggle at first, continuous effort will help you improve.



海外留学

私は、2024年8月から12月までの5か月間、アメリカはオレゴン州のリンフィールド大学で1セメスター（1学期）の長期留学を経験しました。今回の留学を決めた理由は、日本語に頼ることができない環境に身を置くことで、英語力の向上と国際的な人材として成長できると考えたからです。また、専攻が英語文化であることから、様々なバックグラウンドを持つ人々が共に暮らすアメリカで、現地の文化や伝統、生活様式などの本当の姿を自分の目で確かめ、学びたいと強く考えたことも大きな理由です。

アメリカ留学中、同年代の学生たちとの日常的な文化交流が、特に印象深い思い出として残っています。例えば、メキシコにルーツを持つ友人を通じて、アメリカとメキシコの食文化やThanksgiving、クリスマス、年越しなどの祝い方について学ぶことができました。また、リンフィールド大学での授業では、より専門的に英語学習に取り組むとともに、プレゼンテーションの基礎を習得する機会も得られました。

留学前は、自分の英語力や海外生活への不安がありましたが、アメリカで学生生活を送る中で、語学力だけでなくコミュニケーション能力も向上しました。さらに、日本の外が多文化世界に触れることで、自分を取り巻く社会がどれほど豊かであるかを改めて実感し、自己成長にも大きくつながりました。留学で得た経験は、社会人になっても非常に役に立つものになると考えています。

（英語文化学科 3年 星野美鈴）



2024年7月30日から8月1日にかけての3日間、英語文化学科で毎年恒例のEnglish Campが実施されました。このキャンプにはひとつ大きなルールがあり、それはキャンプの期間中日本語での会話が禁止されることです。この授業は毎年とても人気があり、参加者の抽選が実施されるほどです。

2024年からは活動内容も、より英語でのアクティビティを重視する内容になり、さらに「英語漬け」の環境が充実しました。そんなEnglish Campでは、例えば、自らが考えるスピーチを行ったり、英語カラオケ大会が一層盛り上がるイベントになったりと、学生たちがより楽しんで英語に触れられるカリキュラムが行われています。English Campは学生が自ら英語のみで生活する空間に飛び込み、英語能力を伸ばすのにぴったりの経験です。

（英語文化学科 3年 角川健太）



English Camp

Windsurfing World Cup

2024年11月8日～11月12日に、ANAが主催するWindsurfing World Cup 横須賀・三浦大会が開催されました。国際文化学部からも多くの学生が運営ボランティアとして参加しました。この大会には、世界中からトップレベルの選手が集まり、オリンピックの出場経験がある有名な選手も多く参加しています。私たちは、風を待つ「風待ち」の間に選手が利用する休憩スペースで、選手の皆さんに軽食やランチを配るサポートボランティアや、来場者へのアンケート調査および案内のボランティアとして、大会の運営をサポートさせて頂きました。

大会には、フランスやドイツ、オーストリアなどヨーロッパから参加している選手も多くいますが、基本的には英語でコミュニケーションを取ることができます。私たちも、選手に積極的に話しかけることで、普段の英語学習の成果をこの大会を通して確認することができました。また、出身国によって色々なアクセントの英語があり、様々な英語に触れる貴重な経験になりました！

ちなみに大会では、主催企業のANAや京急電鉄の方々のほか、横浜市や三浦市、横須賀市で様々な活動をする地元の方達とも交流する機会がありました。この大会を通して、国際的な経験だけではなく、地域とつながるスポーツ大会の在り方について学ぶことができました。

(英語文化学科4年 中村七星)



国際文化学部では夏のオープンキャンパスで、在学生が来場者の皆さんの質問や相談に直接答える「国際文化カフェ」を開催しています。今回は、2024年8月に開催された「国際文化カフェ」の様子について紹介します。

会場の教室には、海外製のジュースや菓子などを用意し、皆さんが国際文化学部の雰囲気を感じることができる空間づくりを意識しました。学生相談ブースでは、国際文化学部オリジナルTシャツを着た英語文化学科と比較文化学科の学生スタッフが、国際文化学部での海外（交換）留学制度や学生生活、就職活動、サークルや部活、そしてゼミナールでの活動などについて、自分たちの経験をもとに相談にお答えしました。

私は、アメリカのリンフィールド大学に交換留学をした経験をもとに、海外留学の相談ブースでみなさんの質問などにお答えしました。相談ブースでは、正確な情報を伝えなければならないため、初めは緊張しましたが、やがて対応にも慣れ楽しみながら来場してくれた方々と話すことができました。

(英語文化学科3年 佐藤瑛飛)



夏のオープンキャンパス
**国際文化
カフェ**

英語俳句コンテスト

英語文化学科では、毎年「英語俳句コンテスト」を実施しています。24年度の英語俳句コンテストについて、担当された入江先生にお話を伺いました。

Q1. 英語俳句コンテストとは具体的にどのようなイベントですか？

一春に行われる大学生の部と、夏休みから秋にかけて行われる高校生の部に分かれ、年に2回開催されます。

Q2. 英語俳句の面白さとは何だと思えますか？

一日本の俳句と異なり、形式にとらわれない自由な作風が特徴です。英語のリズムに乗せて、季語や韻を含みながら、音の響きやグルーブ感を表現できる点が魅力です。

Q3. 初心者や挑戦する方へのアドバイスはありますか？

一簡単な英語の詩や好きな歌詞を声に出して読むことがおすすめです。季語を使いつつ、色や香り、音でイメージを想像させることを意識すると良い作品につながります。

Q4. 英語俳句を通して学生たちは何を得られると思えますか？

一言葉のセンスが磨かれ、表現力や言葉選びの能力が向上します。その結果、就職活動や面接でも役立つスキルが身につくでしょう。

Q5. 英語俳句コンテストについて伝えたいことはありますか？

一難しい知識は不要で、英単語を調べながら自分のアイデアを表現する過程で楽しさを感じられます。独自性のある言葉を使うことで特別な作品が生まれるでしょう。英語俳句コンテストは創作を楽しみながら表現力を高める絶好の機会です。ぜひ挑戦してみてください！

(英語文化学科 3年 林大輔)



大学生の部 授賞者

ゼミナール 紹介



英語文化学科には様々なゼミがあります。現在、学生は2年の秋学期から4年の春学期までゼミに所属し、4年の秋学期に卒業論文または卒業研究を完成させます。それぞれのゼミでは、英語学、イギリス文化、日英翻訳、アメリカ文化など、担当教員の専門分野に基づいた内容を学びます。

ここでは私が所属している四條ゼミの活動を紹介します。四條ゼミには、文化人類学をベースにアメリカやハワイ、筋トレ（文化的な側面）に興味のある学生が集まっています。文化人類学は、外に出て現地や関係者から直接情報を得るフィールドワークを重視する学問です。

ゼミでは、フィールドワークでのインタビュー方法や実践的な研究手法を学びます。また、四條ゼミではゲスト講師を招いて特別授業を定期的に行っています。例えば、海外出身のラグビー選手を招き、英語でラグビーをしながら文化を学ぶ「英語ラグビー・ワークショップ」を行うこともあります。

こうした活動を通じて、ゼミ生同士が刺激し合い協力することで、チームで卒業論文に取り組む環境が造られていると感じています。

(英語文化学科 3年 鈴木蒼太)



2024年10月17日、関東学院大学SCCにて、THAT Production Companyによる『マクベス』が上演されました。その直前にはワークショップが行われ、複数のゼミの学生が合同で参加しました。今回は、そのワークショップについて紹介します。

ワークショップでは、劇団員の明るく優しいお二方とともに体を動かしながら英語を使うゲームや演技を楽しみました。最初の「ZipZap」というゲームでは、参加者が円になり、隣の人には「ジップ」、それ以外の人には「ザップ」と声をかけながらリレー形式で進めます。また、指された人が拒否するときは「ボイーング」と言います。スピードが上がるにつれ混乱し、笑いが絶えないゲームでした。

続いて、「I'm ~ingゲーム」では、「ピアノを弾いている」「お皿を洗っている」など動作を指定され、それを即興で演じます。次の人には新しい動作を指定する必要があり、簡単そうに見えて意外と難しく、創造力が試されました。最後は『マクベス』の台詞を使った朗読練習です。まず、句読点ごとに動きをつけて朗読し、例えばジャンプしたりしゃがんだりしながら演じました。さらに、二人一組で『マクベス』の会話シーンを実際に演じました。例えば、サーヴァント役は跪き、マクベス役は威厳を持って偉そうに振る舞うなど、動きを交えることで台詞の意味を深く理解できました。

今回のワークショップは、英語を使ったアクティビティと演技の楽しさを存分に味わえる内容でした。劇団のお二方の指導のもと、明るく楽しい雰囲気の中で新たな学びを得ることができました。『マクベス』の公演も素晴らしいものでしたので、機会があればこういったイベントにぜひ参加してみてください。

(英語文化学科 3年 小倉真由)

Shakespeare Workshop

On October 17, 2024, THAT Production Company performed *Macbeth* at the SCC of Kanto Gakuin University. Before the performance, a workshop was held where students from several seminars joined together to enjoy interactive activities with two members of the theatre company. Here is a summary of the workshop and my impressions.

The first activity was a game called “ZipZap.” Participants formed a circle and passed words with gestures: “zip” for the person next to you, “zap” for someone farther away, and “bo-ing” if the chosen person rejected it. While it was simple at first, increasing the speed made it surprisingly challenging and fun.

Next, we played the “I’m ~ing” game. Players acted out tasks like “washing dishes” or “playing the piano” as assigned by others. Then, they passed on new tasks to the next person. As the game progressed, it became harder to think of new actions, adding a creative twist to the fun.

Finally, we practiced reading lines from *Macbeth*. First, each participant recited a long line, adding movements such as jumping or squatting at punctuation marks. This was both enjoyable and unexpectedly tiring for longer lines. Then, we paired up to act out scenes from *Macbeth*. For example, in one scene, the servant knelt while the king, Macbeth, acted with authority.



The workshop was a wonderful experience that combined English, creativity, and fun. The Australian theatre members were cheerful and kind, making the session engaging. The performance itself was outstanding, and I highly recommend joining such events if you have the chance.

教育実習

英語文化学科で教職課程を履修している学生は、4年次に教職実習を行います。今回は、今年度9月に静岡県の母校の高校で教育実習を行った佐野優翔さん(村岡ゼミ)にインタビューを行いました。

Q1. 教育実習ではどんなことを行いましたか？

—教育実習は3週間あり、最初の1週目は授業見学でした。英語の授業だけでなく、他教科の授業も観察を行いました。それぞれのクラスで教え方や工夫などの違いがあり、とても興味深かったです。2週目からは、実際に50分授業を担当し「コミュニケーション英語」「論理表現」の授業を行いました。

Q2. 教育実習で学んだことは何ですか？

—今回の教育実習を通して、授業において「何を伝えたいのか」という本質的な部分を明確にした上で、それを計画的に生徒のアクティビティに反映させることの重要性を学びました。

I interviewed Yuto Sano, who returned to his former school in Shizouka Prefecture last September to conduct his teaching practicum.

Q1. What did you do during your teaching practicum?

—The teaching practice lasted three weeks. During the first week, I observed classes, not only in English but also in other subjects. It was very interesting to see the ingenuity and differences in teaching methods in each class. Starting in the second week, I actually took charge of a 50-minute class, teaching Communicative English and English Logic & Expression.



Q2. What did you learn from the teaching practicum?

—Through the teaching practicum, I learned that it is important to clarify the basic aspects of what to impart in each lesson, and to systematically reflect these elements in students' activities.

(英語文化学科 4年 松野浩也)

入学式がまだ新しい記憶として残っているのに、もう卒業論文を書く学年になっていることに自分自身驚いています。私は今回「日英語の文脈依存度の違い」をテーマに卒論を執筆しました。このテーマを選んだ理由は、草山ゼミ(写真)で英語をより専門的に勉強する中で、英語の表現について「なんでそんなに遠回しに言うねん!」とか、日英の表現を比較「こういうとき日本語/英語は便利だよなあ」と思ったことがきっかけです。

とはいえ、私の場合、何をテーマにするのなかなか決まらなかったもので、まずは学術的な文章の書き方やルールなどアカデミック・ライティングを早いうちから身につけ、テーマが決まったらスムーズに執筆できるように準備をしていました。

卒論で大変だったことは、ダントツでパソコン(Word)の操作です。パソコンが思ったように動いてくれなくて、何回もパソコンと喧嘩しました(勝ちましたが)。一方で、卒論に取り組んでよかったなと思うことが二つあります。ひとつは、「人にたくさん聞く」という経験ができたことです。卒論では、自分よりも知識がある教員にたくさん頼るべきだと思っています。そうして得た知識を道筋に、自身の研究を進めることが大事なのではないでしょうか。もうひとつは、自分の興味のあることをテーマにすることです。私も自分の興味関心を出発点にすることで、今まで自分の中にあった疑問が解決されるとともに、「もっと知りたい!」と楽しみながら研究をすることができました。

これから卒業論文を書く方々も、是非自分の好きなことをテーマに、大学生活の集大成として素晴らしい卒業論文を執筆してもらえたら嬉しいです。

(英語文化学科 4年 工藤亘平)



卒論

就活体験談

私は就活を始めた当初は市役所などの職員（地方公務員）を志望していましたが、最終的に信州大学の職員として就職が決まりました。大学では1年生の時から「学生メンター」*というボランティアスタッフをしてはいたものの、就活を始めたころは大学職員を主な選択肢として考えていませんでした。しかし、結果として学生時代の経験を活かせる職場で、しかも地元に近い地域で就職することができ、「どこに縁があるのか分からないなあ」と感じています。

* 学生生活での困りごと、例えば履修登録の相談や学習のサポートなどをする学生支援室のボランティア

私の場合、3年生の4月から就活を本格的にスタートさせましたが、万全の対策をしても必ずしも上手くいかないのが就活だと思います。また、それぞれの企業について対策をすることにも気力と体力が必要です。根気よく就活を続けるための工夫として、私は上手くいかないことがあっても「就活は縁」（結局は学生と企業の相性）と割り切って、すぐに次のステップに進むように心がけていました。

数え切れない選択肢の中から、自分と合う職場を見つけ出すことは確かに大変ですが、学生時代に様々なことに挑戦していると、その経験とつながる仕事に出会えるような気がしています。

（英語文化学科 4年 黒崎雄斗）



Vista vol.13 ～編集後記～

国際文化学部は、今後より一層の国際性の向上や異文化理解の深化を目指し、グローバル化に特化した学びの場となることでしょう。英語圏に関心がある学生たちが集い、共に成長できる場となるよう今回の『ゼミ通信』を作成しました。

（編集委員 英語文化学科 4年 大石純正）

2026年度から始まる新たな国際文化学部では、専門性と実践力を一層高める学びがスタートします。多様な価値観を理解し、柔軟な思考と行動力を備えたこれからの学生が、国際社会で積極的に活躍することを期待しています。

（編集委員 英語文化学科 4年 工藤まどか）

今回の目標が「読みたいと思ってもらえるゼミ通信を作る」ということから、文字数を少なくして写真を増やし、デザインも新たに関東学院らしい緑をテーマカラーにすることで、視覚的にもなるべくリラックスできるようなデザインを目指しました。

（デザイン担当 英語文化学科 3年 羽田逸里）

編集会議の様子